new 湯浅卓雄

「日本作曲家選輯」で八面六臂の活躍を続ける「発見された」日本人指揮者

湯浅　山田耕作集は、最初に録音しているんですよ。日本にもこういう人がいたという大きな歴史的意義があると思いましたし、作曲の楽譜が揃わなかったという問題があって、出るのが少し遅れたのです。

秋に行なわれる、都響との「山田耕作」作品コンサート

——10月15日に東京芸術劇場大ホールにおいて、山田の作品を都響と共演するという情報も耳にしています。

湯浅　演奏会は、第1部が、《序曲ニ長調》、交響曲《かちどきと平和》、交響詩《曼陀羅の華》、第2部が長唄交響曲《鶴亀》、交響詩《明治頌歌》、そして《鶴亀》は、R・シュトラウスみたいな曲を書いた山田が、邦楽との融合を考えて、邦楽そのものが入っているわけです。邦楽の人たちにクラシックをやらせるということではなく、そのまま取り込んで、それをオケと融合させているんです。

——第2部の2曲に関しては、演奏会後にレコーディングも行われると聞いていますが。

湯浅　はい、そうです。

——今回の大木正夫もそうですが、今後、日本のオーケストラとの録音も増えていくのでしょうか？

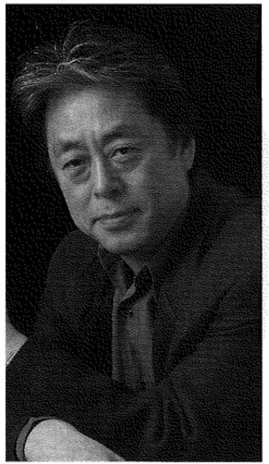
湯浅　どうでしょうねえ。ただ、一般成的に、日本特有の楽器とか、大型の鐘とかが必要とされるケースが出てきますし、その場合に、日本のオケではできませんし、ということでは、「日本作曲家選輯」のシリーズが行き詰まってしまいますから。

日本のオーケストラ、そして聴衆との「これから」

——湯浅さんは、東京の音楽ファンとは接点があまりなかったので、都響との演奏会をとても楽しみにしていた、ということだと思います。生まれが大阪ですし、日本の音楽界を出ていないということが、ご自分の音楽づくりに影響を与えていると感じになりますか？

湯浅　大阪の音大ですので、わかりません（笑）。私は、それは「人間

万博楽器が鳥。だと思っています。ただ、アメリカで勉強を終えてみると、結局、仕事をするにしても日本とは何のコネクションもありません。スタートするまでに、ものすごく時間がかかりました。BBCで仕事することになったとは、大きかったですね。ヨーロッパにいると、以前の私がやっていたようなアイソ、オーストリアものばかりやっている人たちがたくさんいるんです。「これをやりましょう」、「これでは売れない」ということに対して納得をしましたそれで、「じゃあ、それぞれ」となかっと言うと、「あ、それぞれ」となりますす。



ゆあさ・たくお
大阪生まれ、高校卒業と同時にアメリカに留学。シンシナティ大学音楽院作曲理論科を経て、ウィーン国立音楽大学指揮科でハンス・スワロフスキー、フランコ・フェラーラ、イーゴリ・マルケヴィッチ、ロヴロ・フォン・マタチッチに師事。長年巨匠マタチッチのアシスタントを務めた。1976年 ウィーン・トゥンストラー管弦楽団を指揮してデビュー。以後世界中のオーケストラと共演を重ね、その演奏は高い評価を獲得。1996年からは、「トクソス」と専属契約を結び「日本作曲家選輯」をはじめとして続々とCDをリリースしている。現在、最も国際的な活躍が目覚しい日本人指揮者のひとり。2005年の10月15日には、都響と、東京芸術劇場大ホールにおいて、山田耕筰作品のコンサートが行なわれる。

易浅卓雄の最近のCD

黛　敏郎：シンフォニック・ムード、バレエ音楽《饗宴》、交響組曲 ルンバ・ラプソディ
湯浅卓雄指揮ニュージーランドSo
[Naxos　8.557693]

ロースリン：ピアノ協奏曲 第1番、コンスタント・ランバートの主題による即興曲、ピアノ協奏曲 第2番
ドノホー(p)湯浅卓雄指揮アルスター
[Naxos　8.555959]

諸井三郎：こどものための小交響曲 変ロ長調 Op.24、交響的序曲 Op.22、交響曲 第3番 Op.25
湯浅卓雄指揮アイルランド国立so
[Naxos　8.557182]

ヴォーベルン／管弦楽作品集
湯浅卓雄指揮アルスター○
[Naxos　8.554841]

山田耕筰：序曲ニ長調（世界初録音）、交響曲ヘ長調（かちどきと平和）、交響詩《曼陀羅の華》、交響詩《鶴亀》、交響詩《明治頌歌》
湯浅卓雄指揮アルスター○、ニュージーランドso
[Naxos　8.555350]

ラロ：スペイン交響曲 Op.21、ラヴェル：ツィガーヌ（演奏会用狂詩曲）、サン＝サーンス：ハバネラ Op.83、サラサーテ：カルメン幻想曲 Op.25
チョン(vn)湯浅卓雄指揮ニコラウス・エステルハージ・シンフォニア
[Naxos　8.555093]

シェーンベルク：室内交響曲第2番 変ホ短調 Op.38、映画の一場面への伴奏音楽 Op.34、清められた夜 Op.4（弦楽合奏版）
湯浅卓雄指揮アルスター○
[Naxos　8.554371]

矢代秋雄：ピアノ協奏曲、交響曲
阪田知樹(p)湯浅卓雄指揮アルスター○
[Naxos　8.555351]

芥川也寸志：オーケストラのためのラプソディ、エローラ交響曲、交響三章
湯浅卓雄指揮ニュージーランドSo
[Naxos　8.555975]

P.グラス：カンパニー、バイオリン協奏曲、アクアーテン～調舞曲、鏡の
アンソニー(vn)湯浅卓雄指揮アルスター○
[Naxos　8.554568]

オネゲル：交響曲 第3番《典礼風》、夏の牧歌、他
湯浅卓雄指揮ニュージーランドSo
[Naxos　8.555974]

ベルト：タプラ・ラサ、パッハ主題によるコラージュ、交響曲第3番
ハットフィールド(vn)ヒルシュ(vn)湯浅卓雄指揮アルスター○
[Naxos　8.554591]

J・タヴナー：チェロとオーケストラのための《宗教のプェール》、ソプラノ、テープとオーケストラのための《イン・アリウム》
クリーグル(vc)ハルス(S)湯浅卓雄指揮アルスター○
[Naxos　8.558152 ~53]

M.オイマン：ピアノ協奏曲、室内の彼方に聴く
レネハン(p)ハラーム(sax)湯浅卓雄指揮アルスター○
[Naxos　8.554168]

マグヴェル：組曲 第1番 Op.42、組曲 第2番 Op.49（インディアン）、ハムレットとオフィーリア Op.22
湯浅卓雄指揮アルスター○
[Naxos　8.559075]

湯浅　山田耕作集は、最初に録音しているんですよ。日本にもこういう人がいたという大きな歴史的意義があると思いましたし、作曲の楽譜が揃わなかったという問題があって、出るのが少し遅れたのです。

秋に行なわれる、都響との「山田耕作」作品コンサート

——10月15日に東京芸術劇場大ホールにおいて、山田の作品を都響と共演するという情報も耳にしています。

湯浅　演奏会は、第1部が、《序曲ニ長調》、交響曲《かちどきと平和》、交響詩《曼陀羅の華》、第2部が長唄交響曲《鶴亀》、交響詩《明治頌歌》、そして《鶴亀》は、R・シュトラウスみたいな曲を書いた山田が、邦楽との融合を考えて、邦楽そのものが入っているわけです。邦楽の人たちにクラシックをやらせるということではなく、そのまま取り込んで、それをオケと融合させているんです。

——第2部の2曲に関しては、演奏会後にレコーディングも行われると聞いていますが。

湯浅　はい、そうです。

——今回の大木正夫もそうですが、今後、日本のオーケストラとの録音も増えていくのでしょうか？

湯浅　どうでしょうねえ。ただ、一般成的に、日本特有の楽器とか、大型の鐘とかが必要とされるケースが出てきますし、その場合に、日本のオケではできませんし、ということでは、「日本作曲家選輯」のシリーズが行き詰まってしまいますから。

日本のオーケストラ、そして聴衆との「これから」

——湯浅さんは、東京の音楽ファンとは接点があまりなかったので、都響との演奏会をとても楽しみにしていた、ということだと思います。生まれが大阪ですし、日本の音楽界を出ていないということが、ご自分の音楽づくりに影響を与えていると感じになりますか？

湯浅　大阪の音大ですので、わかりません（笑）。私は、それは「人間

万博楽器が鳥。だと思っています。ただ、アメリカで勉強を終えてみると、結局、仕事をするにしても日本とは何のコネクションもありません。スタートするまでに、ものすごく時間がかかりました。BBCで仕事することになったとは、大きかったですね。ヨーロッパにいると、以前の私がやっていたようなアイソ、オーストリアものばかりやっている人たちがたくさんいるんです。「これをやりましょう」、「これでは売れない」ということに対して納得をしましたそれで、「じゃあ、それぞれ」となかっと言うと、「あ、それぞれ」となりますす。

「日本作曲家選輯」では、矢代秋雄のような完成度の高いものを経て、武満のような人が出てきた、という流れを最初に出したかった

目安に演奏するかというと、行き着くところはスコアしかないと思うんです。

オーケストラ・プレーヤーたちの「柔軟性」

——オーケストラの人たちにとって、日本的なものとそうでない作品を演奏する時の意識みたいなものは、あるのでしょうか？

湯浅　いや、それは、聴くだけの人と弾く人の大きな違いだと思います。私が、演奏するにしても、録音するにしても、人物に接するのと同じで、ちょっとずつ知り合っていくようなものです。いわば、朝から晩まで、一緒に生活をして、寝るまでしているような期間を経ていくのです。そのプロセス自体は、有名曲であっても、初めてやる曲も同じです。聴いたことのない曲でも、まずはいろんなところから知り合っていくようにします。アナリーゼをしたり、いろんな資料を集めたりもしますが、結局は、楽譜を読み取っていくことが大切です。大木正夫の場合も、ご本人を存じ上げているわけではないし、人となりも知らないし、そういう意味で、スコアと私しかいないわけです。モーツァルトだって、誰もが知っている作曲家だけれども、私は実際に会ったことはないですし（笑）、結局は、自ら判断するしかありませんから…。

——すると、スコアそのものと湯浅さんとの関係が大事ということですね。

湯浅　楽曲には、スコアの姿というか、スコアが持っている顔があるわけです。そして、顔を見極めて、表情を読み取る。その連続です。私は、日本の曲は、あまり知りませんでしたから、それが逆によかったのかもしれません。先入観というのがありませんから、楽譜をまず見て、アダージョはアダージョだし、メトロノームの数字が書いてあれば、それを読み取っていかなければなりません。もちろん、その中で、「この指定はおかしいだろう」と思うところもあるんですよ。その場合は、自分の中で多少の加減をしたりすることはありますけれど。でも、できる限りスコアに忠実にやっていくことを、第一に心がけています。

ニュージーランドのオケとの「日本人楽曲」録音

——黛敏郎のアルバムには、《饗宴》のように、まだ世に出ていない音源も収録されていますが、ニュージーランドのオーケストラと演奏する課程は、いかがでしたか？

湯浅　難しいところは、もちろんありました。ただ、最近のオーケストラは、昔とは違っていろんな情報を持っています。

国や人のことも、テレビなどを通じてよく知っています。いろんな裏話から日本のいろんな情報が入っていて、昔の人よりはずっと理解は大きいと思います。例えば、曼荼羅に関しては、「仏教の一つの表れの言葉なんだけど、実は自分自身も曼荼羅を説明できるほど、仏教を専門に研究しているわけではない」と前置きして、自分なりの言葉で説明しました。

——オーケストラも協力的なのですね。

湯浅　「日本作曲家選輯」は、いろいろなテイクをいただけれど、みなさん興味津々でした。それに、黛さんにしても、「ああ、あの人か」というのが全くないですよ。私は、それはいいことだと思います。芥川さんが有名な作家の息子であるとか、黛さんがテレビの司会をしていたとかは、なにも知らないわけで、バンバンバンと楽譜から見える姿があるだけなんです。黛さんはこうだから、こんなものか」というのが全くないんですよ。新鮮に音楽の勝負ができたんじゃないかな、と思います。もちろん、先入観が助けになることもあれば、邪魔になることもあります。武満さんの場合、ああいう人柄で、スポークされていてというのがメージがないと音の響きがしっくりと出ません。武満さんの場合は、「ゆっくりの曲しか書けない」と自身でおっしゃっていたけど、その感じがよくわかるし、武満さんを知らない人はひょっとしたらその辺を謎に思うかもしれません。ある意味では作曲家を知ることが助けになると思います。だけど、結局、作曲家は、言ったら悪いけれど、いずれお亡くなりになって、作品が残っていく。それで、次の世代がそれを演奏する場合になにを

日本の曲を、楽器を演奏をしない人に聴かせると、みんなびっくりするんです。要するに、日本のペンタトニックな響きを期待しているんですね。例えば《中国》っていうとあじゃないですか、映画などと必ず流れる変な音楽が（笑）。そういうのがいろいろあるのかな、と思っていたら、きちんとした西洋音楽が流れてくるので、驚きをもって聴いています。だけど、プレーヤーというのは、楽譜をポンと前に置いて、もうそれだけでできるからね。それに対して自分がどう対処するかですから、演奏後に「おもしろい」と言う人はもちろんいますが、日本の曲なのにどうのこうのとは、言いませんね。どこのオケでも、いろんな国の音楽をやっていますから、楽譜が見にくいとか、読みにくいとか、そういうことにはものすごく敏感なんだけれども、出てくる音楽に関しては好き嫌いはあっても、先入観はありません。

——プロフェッショナルの鑑そのもののお話してですね。

湯浅　そう。やはり、オケの人というのは、そういうトレーニングができているんですよ。逆に言うと、日本のオケだったら、プラームスはもちろん、チャイコフスキーでもプロコフィエフでも、いちいち驚かずにできるわけだから、同じことです。

「君、一年に何枚録音できる？」

——「日本作曲家選輯」の場合、湯浅さん外の指揮者もレコーディングを行っていますが、相当する楽曲の割り振りについては、なんらかの基準があるのでしょうか？

湯浅　（きっぱり）実は、私にもわかりません。ただね、（ナクソスを率いている）ハイマン氏には、96年か97年に最初に会いました。私が、ナクソスで録音を行う前の話です。彼が、まず私のところに来て、「やってほしい」という話になり、その時に「どんなレパートリーをやりたいか」と訊いてきました。ところが、ナクソスの場合、普段私がやっているようなレパートリーは、全部録音が済んでいるんですよ（笑）。その時に、彼がチラッと「日本のものを」と言ったのですが、本当にチラッとしか言わなくて、私の脳裏には、ほとんど点のようにしか残りませんでした。数年経ってから、アイノイで片山杜秀さんをはじめ、いろいろな人を集めて全面会議のようなことをやって、本当に始めようということになりました。レパートリーは、「手を大きくふけてアクションをしながら」こーんなにいっぱいあったんですよ。その直後、私が香港フィルに行った時に、ハイマン氏にお目にかかりまして、「仕事はたくさんありますよ」って、ポンとリストをくれました。これをを部やるんですか？」と訊いたら、「君、一年に何枚録音できる？」と言われます。日本のオムニバスの第一弾が出た後、西洋のものをちゃんとした言葉で書き得た人がいたのだということを証明したかったのです。武満について、向こうでは誰もがわかるんです。武満にいまだに、これだけの積み重ねが日本にあり、矢代秋雄のような完成度の高いものを経て、武満のような人が出てきたんだ、という流れを最初に出したいなと思いました。

——あの矢代秋雄のディスクは、インパクトがありましたね。

湯浅　こんな人が日本にいたことを知らなかったことに、みんな驚いていましたね。その連続になるという意味では、シリーズの存在は非常に大きいです。もっとも、まだ海外では売れないらしいですけれども、僕は、オックスフォード通りのショップに行って、「売れてますか？」って訊いたら、「全然売れてない」って（笑）。理もれちゃっているわけですよ。日本だとポーンと置いてあるけど、向こうはスターっと並んでいる中にポンとありますし、そもそも、矢代秋雄の"や"なんて、他に作曲家がいないんですよ。

——それこそ、イサイくらいですね。

湯浅　ええ。矢代、山田というのは、目立たないんですよ。でも、シリーズとして存在感をはっきりと打ち出せたら、今度は、シリーズを探し出して、「知らなかった」という人たちに、「これは、ものすごいものがあるんだ」ということを、ぜひ聴いてほしいですね。